

病害虫発生予察情報(8月予報)

令和3年7月29日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	葉いもち・穂いもち	発生量：少 (葉いもち発病株率1.8%) (穂いもち発病株率0.5%)	7月中下旬葉いもち発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：並か多い (+)
	紋枯病	発生量：多 (発病株率7.3%)	7月中下旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (+)
	ごま葉枯病	発生量：多 (発病株率11.4%)	7月中下旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (+)
	稲こうじ病	発生量：少 (発病株率0.5%)	昨年8月発生量：少 (－) 昨年9月発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：並か多い (+)
	トビイロウンカ	発生量：やや多 (寄生虫数：0.06頭/株)	7月中下旬発生量：少(発生なし)(－) 7月予察灯誘殺数：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (－)
	斑点米カメムシ類	発生量：やや多	7月中下旬発生量：少 (－) 7月予察灯誘殺数：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (－)
	コブノメイガ	発生量：やや少 (被害株率2.6%)	7月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (－)
	イチモンジセセリ (イネツトムシ)	発生量：並 (25株あたり寄生数0.5頭)	7月中下旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (－)
かんしょ	ナカジロシタバ	発生量：多 (寄生虫数0.1頭/m ²)	7月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (±)
	イモキバガ (イモコガ)	発生量：やや少 (巻葉数16.6葉/m ²)	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (±)
	エビガラスズメ	発生量：並 (寄生虫数0.0頭/m ²)	7月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (±)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
温州 みかん	黒点病	発生量：やや多 (発病度0.5)	7月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：並か多い (+)
	ミカンハダニ	発生量：少 (寄生葉率7.2%)	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：並か多い (－)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：多 (寄生果率0.1%)	7月中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (－)
中晩柑類	かいよう病	発生量：やや少 (発病度(果)0.4)	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：並か多い (+)
なし	ハダニ類	発生量：少	7月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：並か多い (－)
	ナシヒメシンクイ	発生量：やや多	7月上旬発生量：並(発生なし)(±) フェロモン誘殺数：多い (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (±)
かき	フジコナ カイガラムシ	発生量：少 (寄生果率1.8%)	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (－)
	ハマキムシ類	発生量：少	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (±)
果樹全般	カメムシ類	飛来数：やや少	7月中旬誘殺数：少 (－) ヒノキ毬果吸汁痕数：並 (±) 気象予報：気温：高い (+)
茶	炭疽病	発生量：多 (病葉数 19.2 葉/1.25m ²)	7月中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：並か多い (+)
	輪斑病	発生量：やや多 (病葉数 3.6 葉/1.25m ²)	7月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+)
	新梢枯死症	発生量：並 (発症枝数 4.9 枝/1.25m ²)	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+)
	チャハマキ	発生量：少 (寄生虫数 0.7 頭/1.25m ²) 発生時期：並	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：少 (寄生虫数 0.7 頭/1.25m ²) 発生時期：並	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (±)
	チャノホソガ	発生量：やや多 (巻葉数 1.5 葉/1.25m ²)	7月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：並か多い (±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (叩き落とし虫数 15.2 頭/4 力所)	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か多い (±)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
茶	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：並 (叩き落とし虫数 1.2頭/4カ所)	7月中旬発生量：少 (－) 防除員からの報告：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (±)
	ヨモギエダシャク	発生量：多 (叩き落とし虫数 0.1頭/4カ所)	7月中旬発生量：やや多 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (±)
きく (施設)	白さび病	発生量：並 (前年8月発病株率：0.0%)	7月中旬発生量：並(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：並か多い (＋)
	黒斑・褐斑病	発生量：やや多 (前年8月発病株率：0.0%)	7月中旬発生量：並(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (前年8月被害株率：24.0%)	7月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
作物全般	ハスモンヨトウ	発生量：やや少	フェロモン誘殺数：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (－)
	オオタバコガ	発生量：並	フェロモン誘殺数：並 (±) ただし、一部地域で多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (－)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

<生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：7月12日～21日）の結果、草丈、茎数、葉色ともに概ね平年並であった。病害虫防除員からのアンケート調査によると、生育は平年よりやや早いまたはやや遅い地域があるが、概ね平年並であった。

7月中下旬のイネ生育調査結果

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)
草丈 (cm)	58.9 (55.3)	72.8 (69.7)	68.7 (66.9)	61 (63)	77.4 (81.5)
茎数 (本)	16.9 (23)	23 (23.2)	18.5 (23.7)	20.2 (21.1)	25.2 (23.6)
葉色 (指数1-7)	4.2 (4.6)	4.8 (4.3)	3.7 (4.2)	4.1 (4.3)	4.1 (4.3)

()内は平年

●葉いもち・穂いもち

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.65%（平年1.84%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（感染好適条件：気温15℃～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20℃～25℃を全て満たす時）。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・上位1～3葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・本県ではMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

●紋枯病

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は1.14%（平年0.87%）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する（本病原菌は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●ごま葉枯病

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は6.04%（平年2.17%）と平年より多かった。
- ・出穂期以降登熟期までの高温は、イネの老化と病原菌の活動を促すため、本病の発生が多くなる（病原菌の生育適温：25～30℃）。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・肥料切れにより発生が助長されるため、穂肥を適切に施用する。
- ・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉の斑点のみならず穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂揃期にかけて薬剤散布を行う。

●稲こうじ病

予報の根拠

- ・昨年8月の巡回調査では平均発病株率は0.25%（平年0.46%）と平年より少なかった。昨年9月の巡回調査では、平均発病株率は1.16%（平年1.75%）と平年より少なかった。
- ・本病は穂ばらみ期頃の低温・多雨により発生が助長される。1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は収穫時に落下した病粒に含まれる多量の厚壁胞子が土壌中に残り、翌年の伝染源となる。このため、常発ほ場では注意が必要である。
- ・本病の薬剤防除は予防散布が基本であり、適期は穂ばらみ期頃である。常発ほ場では、適期に薬剤防除を実施する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・7月中下旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年最高寄生数0.01頭/株）。
- ・7月第4半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、いずれも平年より早く誘殺が確認されており、誘殺数も平年より多く推移している。予察灯による調査結果の詳細は静岡県病虫害防除所ホームページ参照。

防除対策

- ・例年、8月以降に発生量が増加する。
- ・本虫は世代交代を繰り返すことで急激に増殖する。特に8～9月に高温が継続する場合は急増し、数が増えてからでは効果の高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られず坪枯れを引き起こす場合があるため、予防に重点を置いた防除を実施する。
- ・本虫に効果の高い育苗箱施用剤を使用していない場合は、ほ場で確認されていなくても既に寄生している可能性があることから、出穂前及び出穂後の防除を徹底する。また、本虫に効果の高い育苗箱施用剤を使用している場合であっても、出穂前の防除に加え出穂後の防除を検討する。
- ・葉色に注意し、水田内の一部が坪状に黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

- ・7月中下旬の水田周辺における雑草のすくい取り調査では、県平均捕獲数は9.0頭/30回振り（平年19.8頭/30回振り）と平年より少ない発生であり、全調査地点中51%（平年65%）の調査地点から斑点米カメムシ類が捕獲された。ただし、病虫害防除員からの報告によると一部地域で多発がみられる。
- ・周辺雑草から捕獲したカメムシ類のうち、アカスジカスミカメが全捕獲数の88%、アカヒゲホソミドリカスミカメが同10%を占めた。その他、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシが捕獲された。
- ・7月第4半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメの誘殺数は一部（島田市中河、磐田市加茂）で多く、他の地点は平年並～少なかった。アカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平年並～少なく、ミナミアオカメムシの誘殺数は一部（島田市中河）で多く、他の地点は平年並～少なかった。予察灯による調査結果の詳細は静岡県病虫害防除所ホームページ参照。
- ・一部の地域で、出穂前の水田（主に早期栽培）でイネカメムシの発生が確認されており、西日本を中心に同様の傾向がみられている。本種は出穂後に水田に侵入し、籾の基部を吸汁することにより不稔籾を生じさせ減収を引き起こす。出穂前の防除を徹底するとともに、出穂期以降の本種の発生状況を確認し、発生が認められる場合は追加防除を検討する。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本虫の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・斑点米カメムシ類はイネ科やカヤツリグサ科雑草の種子で増殖するため、水田周囲の雑草を除去する。ただし、水稲の出穂間際の除草はカメムシ類の本田への侵入を助長する可能性があるため、出穂 10 日前までに除草を徹底する。
- ・出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・穂揃期（成虫侵入期）とその 7～10 日後（幼虫ふ化期）の 2 回薬剤散布を行うと効果が高い。
- ・粒剤は出穂期に散布する。
- ・農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稲のカメムシを防除する時期に多く、水稲のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報共有を行う等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html）を参照すること。

7 月の畦畔・雑草地における斑点米カメムシ類の捕獲頭数（頭／30 回振）

	田方平坦地	東部高冷地	志太榛原	中遠・西部 普通期	中遠 早期	県平均
本年度	0.3	5.5	8.8	21.0	9.4	9.0
平年	8.1	2.4	22.2	32.3	34.4	19.8

●コブノメイガ

- ・7 月中～下旬の巡回調査では、本種による被害株は認められなかった（平年被害株率 0.3%）。
- ・1 か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本虫の増殖をやや助長する。
- ・普通期栽培では出穂前に加害されると登熟歩合が低下するので、8 月上～中旬に成幼虫の発生状況を確認する。上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。成虫が確認された場合は 5～7 日後に薬剤を散布する。

●イチモンジセセリ（イネツトムシ）

- ・7 月中～下旬の巡回調査では、本種の寄生数は 0.02 頭／25 株（平年 0.02 頭／25 株）と平年並であった。
- ・普通期栽培で葉色の濃い水田では被害が集中するので、葉巻の発生に注意し、葉巻内に幼虫が見られる場合は薬剤防除を行う。

【かんしょ】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

- ・7 月中旬に行った巡回調査では、平均寄生幼虫数は 0.9 頭/m²（平年 0.2 頭/m²）と平年より多かった。
- ・1 か月予報では、降水量は平年並か多いものの、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 幼虫は齢期が進むと葉を食い尽くすので注意が必要である。
- ・ 幼虫が多数見られるようであれば直ちに薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

- ・ 7月中旬に行った巡回調査では、平均巻葉数は0.2葉/m²(平年2.7葉/m²)と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いものの、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 例年、8月は葉の繁茂に伴い巻葉数が増加する。多発生のは場では、被害が拡大する前に防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

- ・ 7月中旬に行った巡回調査では、平均寄生幼虫数は0.1頭/m²(平年0.03頭/m²)と平年並だった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いものの、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【温州みかん】

<生育の概況等>

生育は平年に比べて5～7日程度早い地域が多く、着果量は平年よりやや少ない傾向の地域が多い。

●黒点病

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.38(平年0.19)と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 防除実施以降の累積降雨量が250mm～300mmに達した時点、または防除実施日から25～30日経過が次の防除実施の目安となる。アメダスの気象データなどから栽培地域での累積降雨量を確認し防除を実施すること。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は3.8%(平年11.6%)と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本虫の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 夏期は天敵(カブリダニ類など)の発生が多くなるが、ミカンハダニが多発している園(葉あたり3頭を超える園地)では薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、本虫の平均寄生果率は0.5%（平年0.2%）と平年より多かった。果梗部の平均被害度は0.3（平年0.8）と平年より少なく、果頂部の平均被害度は0.13（平年0.04）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本虫の発生をやや助長する。

防除対策

- ・アメダスの気象データを用いた予測では、今後気温が平年並で推移した場合、第5世代成虫の発生ピークは8月2～20日、第6世代成虫の発生ピークは8月20日～9月9日と予想される（発生ピーク時期は地域によって異なるため、各地域における成虫発生時期の予想については静岡県病害虫防除所ホームページを参照）。
- ・薬剤防除適期は各世代の飛来ピーク7日前～当日までである。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上の光反射シートマルチを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

<その他の病害虫>

●ゴマダラカミキリ

防除対策

- ・病害虫防除員からの情報によると、各地域で成虫の発生が多い。成虫の飛来が多い園地では、地際部の樹皮下に産卵された卵や孵化幼虫を対象として、主幹から株元にかけて薬剤散布し、幼虫の食入を防止する。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.36（平年0.66）と平年より少なかった。また、葉の発病度は0.29（平年0.25）と平年並であった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・傷口より感染するため台風など強風雨は感染を著しく助長し、発生量が少ない圃場でも急激に多発する恐れがある。また、感染した組織内の病原菌に対して薬剤の効果はほぼないことから、気象情報とほ場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防散布に重点を置く。
- ・ミカンハモグリガの加害による傷は、感染を著しく助長するため防除する。

【なし】

<生育の概況等>

生育は平年より5～7日程度早い。果実の肥大は平年並であるが、一部では肥大の良い地域もある。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・7月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年の平均寄生葉率4.2%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本虫の発生をやや助長する。

防除対策

- ・発生園では収穫前日数に注意して防除を行う。
- ・葉当たり雌成虫密度1～2頭（寄生葉率20～40%）が防除の目安である。この時期は増殖が速いので園内の発生状況をよく観察する。

●ナシヒメシンクイ

予報の根拠

- ・7月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年の平均寄生葉率0.02%）。
- ・浜松市内のフェロモントラップの誘殺数は、平年に比べて多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本虫の発生を助長する。

防除対策

- ・例年8月は成虫の発生が多いため、無袋栽培園では収穫時期に注意し、防除を行う（誘殺データは静岡県病害虫防除所ホームページを参照）。

【かき】

<生育の概況等>

生育は地域によってばらつきがあり、平年並～10日程度早い。着果量は平年並～少ない。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年の平均寄生果率1.0%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並か多いため、本虫の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・発生がみられるほ場では直ちに防除する。本種は果実とへたの間の薬剤が届きにくい所に寄生しているので散布を丁寧に行う。

●ハマキムシ類（チャハマキ、チャノコカクモンハマキ）

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年の平均寄生葉率 1.2%）。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本虫の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 両種の第2世代成虫発生時期は8月上旬～中旬まで長くなることが多い。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意し適期に防除する（誘殺データは静岡県病虫害防除所ホームページを参照）。

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・ 県内6カ所のフェロモントラップにおける7月第1～3半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが87.2頭/箇所（平年287.6頭）、ツヤアオカメムシが2.3頭/箇所（平年3.8頭）と平年より少なかった。7月第1～4半旬の予察灯における合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシは72.0頭/箇所（平年131.2頭/箇所）、ツヤアオカメムシは5.0頭/箇所（平年20.2頭/箇所）と平年より少なかった。
- ・ 繁殖場所であるヒノキ・スギにおける7月中旬のカメムシ類の平均寄生数は、10結果枝あたり0.7頭（平年1.5頭）と平年より少なかった。
- ・ 7月中旬のヒノキ・スギの毬果量調査では、平均結果量指数が3.4（平年4.5）と平年よりやや少なかった。
- ・ 7月中旬のヒノキ毬果での吸汁痕数は平均1.1（平年1.1）で平年並であった。
- ・ 以上の結果、フェロモントラップ・予察灯での誘殺数やヒノキ・スギにおける寄生数が平年より少なく、ヒノキ毬果の吸汁痕数が平年並であることから、8月の果樹園への飛来はやや少ないと考えられる。なお、カメムシ類の好適な餌であるヒノキ毬果において、毬果1個あたりのカメムシ類による吸汁痕数が20を超えると、カメムシ類はヒノキ・スギから離脱し、餌を求めて果樹園へ飛来する。

防除対策

- ・ フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、静岡県病虫害防除所ホームページを参照する。
- ・ ヒノキ、スギ林付近の果樹園では飛来しやすいため、ほ場の発生状況をよく観察し、発生が見られれば防除を行う。

【茶】

＜生育の概況等＞

7月中旬の巡回調査時では、三番茶芽が生育中の茶園と、二番茶後に浅刈りを行った茶園が多く認められた。また、芽の生育も茶園によりばらつきがみられた。防除員からの情報では生育は平年並～7日進んでいる。

●炭疽病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均 16.9 葉/1.25 m²(平年 14.1 葉/1.25 m²) と平年よりやや多かった。
- ・本病の感染には新芽生育時に 10 時間以上の濡れが必要である。1 か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する(分生子の発芽適温 22～27℃)。

防除対策

- ・新芽開葉期に半日以上続く降雨があった場合は、早めに防除を行う。なお、萌芽期～1 葉開葉期には予防剤(ダコニール 1000、フロンスайд SC など)を使用することでDMI 剤(FRAC コード 3)の連用を可能な限り避ける。

●輪斑病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均 16.7 葉/1.25 m²(平年 17.5 葉/1.25 m²) と平年並であった。
- ・本病の発病は 25℃以上の高い気温が好適である。1 か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が発病に必要なため、常発園では、整枝等の作業を行った際には、翌日までに薬剤による防除を行う。

●新梢枯死症

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均 0.7 枝/1.25m²(平年 2.3 枝/1.25 m²) と平年より少なかった。なお、本症状の原因として輪斑病菌が関与しているものは半数程度であることが判明しており、残りは多雨による水腐れや高温等による生理的な要因と考えられる。
- ・1 か月予報では、気温は平年より高いため、本症の発生を助長する。

防除対策

- ・三番茶を摘採しない園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に、三番茶を摘採する園では、秋芽の萌芽期から生育期に、2 回程度薬剤を散布する。なお、QoI 剤(FRAC コード 11 商品名:アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル、フリントフロアブル 25、ファンタジスタ顆粒水和剤、スクレアフロアブル、ナリア WDG)は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

●チャハマキ、チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが0.14頭/1.25㎡（平年1.29頭/1.25㎡）、チャノコカクモンハマキが0.04頭/1.25㎡（平年1.03頭/1.25㎡）で、両種ともに平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いものの、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。
- ・ 本年は第1世代成虫発生時期が平年並～やや早かった。第2世代成虫発生盛期は8月上～中旬と予想され、平年並～やや早い見込みである。このため、第3世代幼虫を対象とした防除時期は8月上旬から中旬になると予想される。

防除対策

- ・ 地域の子察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは静岡県病虫害防除所ホームページで提供している。
- ・ 成虫活性のある薬剤（サムコルやディアナ）を使用する場合は、8月第1～2半旬頃に、慣行の幼虫期防除では8月第3～4半旬頃が防除適期と考えられる。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は2.6葉/1.25㎡（平年1.2葉/1.25㎡）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多く、気温は平年より高いため、高温により本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・ 新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・ 二番茶後に浅刈りした茶園が多く、そのような茶園では新芽の生育時期が例年とは異なる。そのため、地域の子察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移に注意し、成虫の発生盛期と新芽の生育時期が合致する場合は、新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病虫害防除所ホームページで提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は6.7頭/4カ所（平年12.8頭/4カ所）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いものの、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年、8月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は1.8頭/4カ所（平成3.0頭/4カ所）と平成より少なかった。ただし、病害虫防除員からは、12名中5名が平成に比べ多いと報告されている。
- ・1か月予報では、降水量は平成並か多いものの、気温は平成より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・近年、8月の発生量は7月に比べ同等かやや少ない傾向である。ただし、新芽生育期は発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽開葉期に防除を実施する。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.16頭/4カ所（平成0.09頭/4カ所）と平成よりやや多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平成並か多いものの、気温は平成より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・平成では、8月中旬頃から予察灯への成虫誘殺数が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

<その他の病害虫>

●チャトゲコナジラミ

- ・7月中旬の巡回調査では、成虫が盛んに発生している茶園が散見され、発生時期は平成並であった。
- ・幼虫は裾部の葉裏に多く生息するので、防除の前に裾刈りを行い、幼虫の寄生している葉を枯らす（幼虫は移動できないため、寄生した葉が枯れると死亡する）。その後に薬剤散布を行うと、薬液が茶株の内側まで十分に付着し防除効果が高まる。

●マダラカサハラハムシ

- ・一番茶時期に被害が発生したような常発地域では、新成虫が発生する8月中下旬頃の防除を徹底する。薬剤については、「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（HP：<http://www.s-boujo.jp/>）」を参照する。

【いちご】

<その他の病害虫>

●炭疽病

- ・本病の生育適温は25℃前後であり、また、分生子が頭上灌水や雨滴の跳ね上がりにより飛散することから高温・多湿条件下で多発生しやすい。一度発病してしまうと薬剤での治療が困難なため、苗場では定期的な予防散布に努める。
- ・発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。移植時には感染苗を本ほへ持ちこまないように十分注意する。

●うどんこ病

- ・育苗中の防除を徹底する。高温期は本病の発生がいったん終息したかのように見えるが、最高気温が30℃を下回るようになると再び発生する恐れがあるため、予防防除を継続し本ぼへの持ちこみを防ぐ。

●コガネムシ類

- ・磐田市内における予察灯調査によると、誘殺数はドウガネブイブイが平年並、アオドウガネは平年よりやや少なく推移している。
- ・発生がみられるほ場では、薬剤散布を行う。

●ハダニ類

- ・発生がみられるほ場では、薬剤散布を行う。育苗期に防除を徹底し、ハダニ類を本ぼへ持ち込まないように注意する。

【きく（施設）】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●白さび病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（前年発生なし）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（本病の発病適温 17℃前後）。

防除対策

- ・発生ほ場、特に罹病性品種では薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（前年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する（生育適温：黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

- ・本病は多湿によって発生が助長される。また、潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、多湿な条件が続く場合は薬剤の予防散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均被害株率は11.4%であった（前年22.3%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、アザミウマ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 開花期のキクは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 県内3カ所（静岡市、御前崎市、磐田市）のフェロモントラップの調査によると、誘殺数は平年並〜少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 初期発生に注意し若齢のうちに防除を行う。施設栽培では施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。
なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 浜松市のキク産地2ヶ所（西区協和町及び伊佐地町）におけるフェロモントラップの誘殺数は、協和町で平年より少なく、伊佐地町で平年より多く推移している。磐田市のフェロモントラップでは、平年より発生は早いものの誘殺数は平年より少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本虫の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年8～9月は発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和3年7月22日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 7月24日から8月23日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率50%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	40	50
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	30	30
1週目	気温	20	40	40
2週目	気温	10	40	50
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月 : 7月24日(土)～8月23日(日)

1週目 : 7月24日(土)～7月30日(金)

2週目 : 7月31日(土)～8月6日(金)

3～4週目 : 8月7日(土)～8月20日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>